九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『児戯笑談』 : 解題と翻刻（二）

脇山, 真衣
伊万里特別支援学校

https://doi.org/10.15017/1916253

出版情報：文獻探究. 55, pp.38-53, 2017-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『児戯笑談』　解題と翻刻（一）

脇山真衣

解題

『児戯笑談』（寛延二年刊）は近世中期に活躍した庶民教導家、中村三近子の作品である。徳川吉宗の改革によって庶民教化の機運が高まった享保年間、佚斎樗山のような談義本の嚆矢ともいわれる人物が登場したことは、はやく三田村鳶魚『教化と江戸文学』（大東出版社、一九四二年）でも言及されるが、この他にも、京で神道講釈を行った増穂残口や俳人常盤潭北、本論で後に言及する大坂の田中友水子など、数多くの庶民教導家が登場する。その中の一人が京で庶民教導に精を尽くした中村三近子である。

中村三近子。京都の人。号絅錦斎（けいきんさい）、称平吾、名一蒼、通称勘介、一時名を一載とした。寛文十一年（一六七一）、平姓、式部少輔の家に生まれ、寛保元年（一七四一）に没する。幼少期に山崎闇斎に師事し、宝永五年（一七〇八）頃から二年ほど尾張に出仕した後、京で三近堂なる私塾を開いたとみられる。『類聚名物考』（1）には

三近子　●享保の比、京都の士なり。中村平五と云ふ。三近子は別號也。又は絅錦齋とも云へり。印章に楊居家印と云ふ四字有り。柳の馬場に家有しか、節用集の作なり。道の紀も有り、寺子屋なとにても有し歟。俗儒歟。

と寺子屋の師としても紹介され、著作は節用集の類や随想風教訓書など三〇点近くに上る。

三近子については、中野三敏「静観房まで―談義本研究（五）」（『戯作研究』、中央公論社、一九八一年（初出は「樗山以後、静観坊まで」（『近世文芸研究と評論』第五集、一九七三年））がその著作の概観を示し、和田光弘が一連の論考の中で、教育・思想史的観点から三近子の庶民教導論を明らかにしてきたが、両氏が指摘する三近子の特徴的な思想が「善念」である。

「善念」とは、明から伝わり、荻生徂徠が和点を施した『六諭衍義』に現れる語である。三近子はそれを「すべての人々に備わる善を嚙み分ける心」と解釈し、談義説法や教訓によって涵養され、「善念」が発揮されると、学問、孝行、尊敬、和睦等の善事につながると自らの教化論を展開する。そして、教化対象を卑賤に広げたのが『児戯笑談』であった。『児戯笑談』で三近子はすべての人が「善念」を有する「善人」であることを根拠に、卑賤の学問の可能性や必要性を説く。のち

の絵本『絵本清水の池』に贈った序文を見ても、三近子が卑賤の教訓に特に力を入れていたことが見て取れる。これだけの著作を残した三近子が示す庶民教化論は、石門心学とも近接しながら、独自の展開を見せる。吉宗政権の教化政策が興隆した近世中期に、その教化政策はいかにして受容されたのか。思想、そして教訓色の強い談義本などの文学といかに関わっていたのか。それを明らかにするためにも、『児戯笑談』はその一端を知る手がかりとして、翻刻するに足る資料であろう。

以下底本の書誌について報告する。

●底本書誌

【所蔵】九州大学附属中央図書館読本コレクション（読本Ⅱ-4／寛延2／ナ-1-1～4）

【巻冊】四巻四冊。

【刊写】刊。

【書型】半紙本。縦二二、四糎×横一五、七糎

【表紙】紺色無地。原装。

【題簽】「児戯笑談　児（～談）」。刷題簽、子持ち枠、左肩貼付、原装。

【序文】「児戯笑談序」寛延己巳冬十月　鈍全

【内題】「児戯笑談巻之一（～四）」
全巻二行目下に「中村平吾三近子撰」

【尾題】「児戯笑談巻之一（～四）終」

【跋文】なし

【刊記】寛延二年巳霜月　江戸通本町三丁目
西村源六
京堀川通錦小路上ル町
西村市郎右衛門

【広告】「射法一流」「六論衍義大意」など全四十一点
末尾に「京都書林　西村市郎右衛門」
最終丁頭に「中村三近子選述
俗字指南車　全一冊　板行出来
六論衍義小意　三冊　同出来
児戯笑談外篇　四冊　追而板行」

【構成】巻一　序文二丁、本文一九丁
巻二　本文一七丁
巻三　本文一七丁
巻四　本文一七丁、広告一丁、刊記一丁

【匡郭】四周単辺

【柱刻】「児戯笑談巻一（～四）」

注

（1）山岡浚明編、宝暦三年～安永九年にかけて編纂された類書。（古典文学大事典第6巻）引用は、歴史図書社『類聚名物考1』巻四十二　人物部十一　名家儒術　昭和四十九年、七〇三頁により、適宜句読点を補った。

凡例

一、本文には適宜、句読点、濁点、半濁点を付した。
一、字体は通行のものに改めた。
一、畳字は「ゝ」「ゞ」「々」等で表し、二字以上は「〳〵」「〴〵」で表した。
一、ルビと送り仮名の一部が重複している箇所はそのまま翻字した。
一、本文・ルビ中の不審箇所には、ルビ中に（ママ）と記した。
一、本文・ルビのうち、虫食いによって判読不能な箇所は架蔵本『児戯笑談　戯』（刊記不明）にて補った。
一、丁うつりは、」（丁数・オ／ウ）とし、原則底本の丁付に従った。
一、敬意を示す闕字は反映していない。
一、漢字に濁点があり、かつルビの無いものには、ルビの位置に（　）を付し、ひらがなで読みを記した。

児戯笑談序

三教四庫の書はさら也、詩歌諸芸の巻々、大和唐土むなきにみち、牛にあせする事いふもふるし。其書籍ことに序なきはまれ也。三近子のあめる理会集のはしに一言をかうふらしめよ、とすゝめられ、辞するもかへりておこがましく、まづ、一覧の一冊に始終をしはかられ、面白草と名づけ給はん哉、とたはむれければ、はや児戯笑談と題せしよしを聞、例の興吟を書付るのみ。

すみ濁り世のものすきは題号のゑいとあしとにさうらふの水

寛延己巳冬十月

鈍全印（「蘭」）

本文

児戯笑談巻之一

中村平吾三近子撰

学問といふ物、万巻の書を積ならべて見るを学問とはいふべからず。たとひ百年の星霜を経て普く見亘したりとも労して功なし。米を粒〳〵々磨精げるが如し。一臼に壱斗の米は凡五六十万粒も有べし。杵の数二三百度にて、粒々まんべんに精となる。古人の書一書なりとも杵に

して見るならば、百万巻の書ともいへ、みな融通して片行は有まじ。太平御覧・文献通考・百川学海・三才図会・通史などの書を見よ。皆頰を」（1・オ）顔へ直したるごとく、文字の居所を替たるまでなり。見ずとも事の欠べき品にあらず。

古より膠レ柱といふ語あり。柱は十三の駒ありて、あなたこなたへうつして音をとり、調子を合する物也。膠を付ておけば、調子くるふて琴にあらず。人間の生稟には賢愚智鈍をはじめ、得手不得手避愛禁百千万差あり。それにいかに善事なればとて、生質の目かりもなく、めつそうに学問をせよ〳〵とせこを入るゝ時は、善事がうるさくなりて、結句邪になるべし。無二無三に学問をすゝむれば、柱に膠して調子の違」（1・ウ）がごとし。

元より学問の道、四書六経の文義をさとし、古事来歴をよく覚え、古人の行跡にのつとり、能節義を守るを学問といふ事、是は何かあらん。無上の学問といふべし。しかれども、さやうの綿密の学問は、百人が九十八人もつとめぬものなれば、畢竟せまくして、諸人のために成がたし。人間には相応にとりゑといふものあり。其とりゑある所より身を脩め、生理を勤るすぢ、得心すべきおしへかた有」（2・オ）べし。いかなる姥嚊の茶のみ付合にも、某所その子息はだまりものにて、親に孝行で性がよいといへば、座中の男女もよい事は魂によいとしるが平等ゆへ、誰々も是を聞て心中にうらやましくおもふ所は、人々すべて、善念をそなへしゆへなり。其善念を事々物々にうつすやうに心得たる時は、是直に学問也。

夷中ものは、生質律儀にして偽りなし。知れる人の家に、奥丹波よりはじめて京へのぼりたる百性の客あり。長兵衛となんいひしとぞ。」（2・ウ）今日は日和もよしとて、かの長兵衛を四条がはらの芝居へやりけり。その時分、大友の真鳥の狂言、殊に大あたりにて、狂言ながく、長兵衛も日ぐれ過にかへれり。宿の亭主が、長兵衛殿はいかふおそく帰り給ふと云ければ、されば其事候。国もよく治りて、何の事もなかりし時、すみ前髪の男いでゝ、それより国もみだれ、もんだいもなく入組候ゆへ、かやうに暮に及びたり。角前髪さへ出申さねば、我々〳〵もはやく四つ時にはかへり申にて候、と語り」（3・オ）しとぞ。田舎の風俗おかしきはなしのやうなれども、かくのごとく質素淳直なる所に思慮を付れば、善にすゝむの学問の一端といふべし。

尺蠖之屈欲レ伸といふて、喩ば尺とり虫の背を立てゝ屈むは、伸て先へ前みゆかんがためなり。人間の万事屈伸の外なし。俚諺に、一寸伸れば尋伸るといへり。易に吉凶悔吝をいひて、人生の万事吉は一にして凶は三つといへども、克たちかへりて工夫を付れば、吉にして伸る方は多く、凶にして屈む方はすくなしと見えたり。」（3・ウ）雨天三日つゞけば、諸人慵く思ひ、十日の快晴にはいさゝか気を屈する人なし。人間の盛衰常に屈んで伸る事は希なり、と思へ共、

諸人足る事をしらぬゆへ、一生を誤りて過ることおほし。卑劣なる譬なれども、此書は一向下賤のための学問教訓なれば、上品の人に説にあらず。毎年七月十四日極月晦日を二季の際といふて、借銭乞といふ商人家々に入つどひ、別て大晦日の夜は夜半過まで催促してせがみ立、喧咤たら〴〵罵詈悪口、つかみ」（4・オ）合て立腹する時は、卑賤として身も縮まり、屈みて断末魔の苦をなし、土の底へも入たき心地する分野なり。かやうの体を嵯峨の安入といへる誹諧師が

今こゝにしばし死たき年の暮

卑賤の正直にして突詰たるものは、此瀬にたへかねて自害に及び、縊れて死する者あり。近比文盲なる意気方のこり多き事なり。宿まで果し眼に成たる借銭こひも、一天開けて元日になれば、麻上下をいためて付、」（4・ウ）先刻まで忿りたる顔もせず、御慶目出たく若やぎ給ふとて、ゑがほよく祝義をのぶ。これ節季には、一日か三時ばかりの間は屈むといへども、明れば長閑にのび〳〵となる、又五十日も百日も伸る品、これ一寸のびれば尋のびるの理り、いやといはれず。然れば、命はものだね、暫しの苦痛を心法してかんにんすれば、又天のめぐみにあふべき事ぞかし。此屈伸の道理をよく〳〵学問して堪るが下賤の道なるべし。貧家一飯の助けなしと」（5・オ）いへども、心を紊さねば、塩をなめても七百日は性命をたもつといへり。其日数のうちには、などか天報の助けなからんや。楠が水舟を三百軒の筧にならべて六十日の間には、などか雨降らざらんやと謀りし格也。

大黒恵美須の両神は福の神なれば、朝夕に灯明御酒などさゝげて、随分丹誠して福徳を祈るべし。遅速ははかるべからず。かならず納受あるべし。丹誠になりては、曽てむなしからざるもの也。勿論古釈なる人は大黒神に」（5・ウ）福をいのる事、愚痴の至りとあざけり。大黒にむかひて我身の勝手づくを祈たりとも、労して功あるまじきとてあざわらふ人は、一理は聞えたるやうなれども、其見識もつとも未可也。諸人ともに神に勝手づくをいのるは多くは人に害妨ありて、己に益あれども人に損がありて、利害平等にゆきわたらず。恵美須大黒に唯福をいのる事、第一人に害なし。人に害なき祈りは仁道より出るといへり。古釈人が身勝手と笑へども、天下の」（6・オ）人いづれか身の勝手を思はざる者あらんや。後生ねがひ、仏の誓願によりて、われら臨終に断末魔の苦患もなく、すぐに安楽浄土に成仏するやうにといふは、皆身の勝手にあらずしてなんぞや。善事はもとより盗賊をするも、皆身の勝手よりする事なるべし。同じ身勝手ならば、他人に少も妨のなき大黒神にいのりて、上見ぬ鷲とさかへたらば、中々おもしろかるべし。

梅干のはなしを聞ば、忽ち口に津涎がたまる。」（6・ウ）是を感通といへり。むかいに離れ居る人の口上に唾がたまるといふ物は、梅干は酸といふ実が有ゆへ、端的に感通す。これを梅酸の渇と名づく。軍

事は元より平日急所にはしるに、息絶の時梅干を思へば、そのまゝ口中にうるほひ出来る事、菅神の発明し給ふよりおこれり。殊に天神は梅を好ませ給ひ、塩梅の臣とも仰ぎ奉りし故に、丹誠の実を以て祈れば、梅酸の口にうつりて感通利生、端的ならずといふ事なし。」（7・オ）神前には鏡をかけて、邪生曲直を示す。かゞみは向はねばうつらず。梅干は向ふに及ばず。臥て居ながら一念思ひ出しても、其まゝうつりて津のたまるを理会べし。此実といふ物を慮るが学問にして、外に需る事にあらず。いとたふとき事也。

人間におしなべて一代の守本尊といふが有て、其身を守護し給ふのよし也。是程たしかなる守護は有べからず。殊に大日不動観音普賢などいへる奇れたる一枚看板の仏」（7・ウ）菩薩たちが乗うつりて付添給ふに、いかなれば悪逆不道をなし、家焼人殺盗賊蜜夫などいふ大それたる事を仕出し、多病早世貧苦横難の不幸のかぎりなし。これらを守本尊として見給ひながら、きよろりとして居給ひ、今はこふよと見へし場も極はず、むなしく見のがしにし給ふ事、何を守り給ふ事ぞ。不審はれがたし。人間にても、或は喧咤口論の場に行かゝりては、双方無事に取納め、武士たるものは時宜によりて」（8・オ）助太刀をなす。まして況んや守本尊をや。男女の色にせまりて、心中とて、二つともなきいのちをたがいにつきつらぬかれて死する程の場所に、守本尊は何をして居給ふ事ぞ。大経師おさん茂兵衛が蜜夫の時分も、おさんは勢至菩薩、茂兵衛は普賢菩が守り本尊のよし、一代のつき添なれば、たま〳〵本尊衆留守なる事もある内に、蜜夫せまじき物にもあらず。其後ながき牢舎、さて、御仕置の時分いかなりとも守り本尊」（8・ウ）かけ付て、こゝは助け給ふ筈なるに、やはりその通りに見捨給ふは守本尊の役義がたゝぬ事ぞ。かくいへばとて、わる口にても理屈ばりて詰といふにあらず。学問の道究理といひて、疑しき事はいづく迄も繹究むるを格物致知といへり。僧に問へば、悪人貧者には守本尊もの き給ふといへり。それは近比水くさき挨拶仏も縁に付給ふ道理なり。善人はさして加ふる事もなきゆへ、守護に及ばず。悪人にこそ守りに」（9・オ）油断なく、不道をさせぬやうに世話やきたまふこそ本意なるべし。かしくといへる辻放下が、人間一代の守本尊は仏菩より飯と汁との二つ也。貴賤ともに此二つの守り本尊に見かぎらるゝと、此世の暇乞といひしは名言なり。

文字の数三万三千字の多き中に、勤の一字こそ人間一生の守本尊なるべし。天道の運旋一息の間断なく、さもいそがわしき勤なり。地に在て川流昼夜を不レ舎の」（9・ウ）もやう、君と成ては日夜臣民を哀憐撫育するの勤め、臣としては陰日なたなくつとめ、農工商も面々の生理を勤め、僧は読経して仏に不退の勤行をなし、女は縫針をつとめ、たとひ貧人菰かぶりともいへ、正道律義を守りて、人の情を囉嚌て今日を助かり、勤て油断なければ、終には天報の祥を得る事、これ勤

の一字は一生の守り本尊にして、人倫の魁の学問なり。されば勤の字を大原大明神託して曰、」（10・オ）

折を待ず時をしらぬはあわれなり
　勤めてもみよ暮るゝ日やなき

古人の学問にすゝめる語に、最初に学ぶ事の正、其次は志を立る、此二つを第一にときいましめたり。志をたつるは善悪にあるべき事也。諸芸ともに先づ正しき流義を吟味して、夫から志をたてゝ、怠慢なく稽古するが干要なり。すぐならぬ道、よろしからぬ芸など、吟味もなくふか〳〵と習ひ、志を立る時はもとが不正なる故、その道」（10・ウ）熟しても利する所なし。

初に吟味正しくする事、大切なる事也。たとへば、下々の子共を商家の町人へ年季奉公をさせるに、親方をも吟味せずして奉公に出す時は、其町家身上もよろしく、万端倹約をもちいておごる事なき家へ年季つとむれば、身上を別にもちかため、親方同前にもなる事也。かやうなるは学ぶ事正しき類なり。又町家としておごりを極め、遊楽遊女ぐるひなどに放埒なるを親方にいたしたる時は、年季」（11・オ）つとめおらせても、何のやくにたゝざる仕廻に成て、主人のおごりを平生くせに見来れば、其身のはて口、親をはごくみ、妻子をやしなふ事もならず、貧人同前になる類、これははじめまなぶ事の正しからぬ不吟味なる所よりかくのごとし。よろづの事に学ぶ事の正しくといふ初の念、第一に入る事也。学問ばかりの事とおもふべからず。

凡学問には、初学より次第に階級あるべき事なり。しかし、万書教道端をゝくどぎ〳〵」（11・ウ）して、いづれよりまなび、いづれより至る筋定めがたし。まづ、学問は博聞約礼の二つを呑込たらば、然るべからんか。博聞はひろく万書を閲亘す方なれば、誰もいたし安からん。かの博き所を一つに引しめて、約礼にする事がおぼつかなきものなり。約とは千筋の藁といへども、手本を縄にてからげる時は、一束につゞまるゆへ、まづ事おほからずして、万事に処するに労する事なかるべし。千筋のわらを一所につかねもせず、ばら〳〵取ちらかしたる」（12・オ）までにて、何の用にもたゝざる事なれば、博聞約礼の掟は欠まじき事なり。

往古よりの教書に、武士たらん者は一言にても異見を聞、かりそめの咄しにも忠孝文武の吟味をなし、小歌三味せん等の楽舞ときかば、行べからず。たとひ行かゝりても、外の事に託して退くべし、との教訓一々理を詰たる詞なれば、教訓におゐて加る事なし。しかし、武士まじはりとても、若き者の付合に義理を談じ、異見を互にいたし合ふばかりにては、」（12・ウ）結句和をうしなひ、又例の子細らしき異見に来たかと異見に異名が付て、あなたこなたにても留守をつかふ様になりて、人心はなれて却てにくしみを取る人情なり。三近子が見によらば、武士の付合に、若き者は腕押首引力業とんづ躍つの楽舞の

所へ行かゝりたらば、同じく楽舞にまじわり、興を催し、又折々はしまりて忠孝義理ばなしを催す時は、朋友も飽目なく異見も出来ばへして、結句利益多からんか。余り」（13・オ）古工面過れば、人情にはなれて独夫の意気かた、水清ければ魚住ずの一理ならん。家中どし、我より目下の近親などの若き士五人三人などへは、異見等もうつる事あらんか。日本国の諸士へは、平等にうつりがたからん。上世さへ孟子の大賢に色を好とあれば、孟子少もそむかず。それこそ尤にて候とて相手のすき〴〵次第に教訓せられしは尤なる示なり。

或三近子に問ていわく、貴下は山崎垂加翁の膝下に育ち給ひしといへば、幼年ともいへ、儒学」（13・ウ）も少し聞はつり給はん。夫に念仏題目読経供仏の経営は、面々心一ぱいにいたすべし。せめての孝養なるべしと小意の中にも書給へり。貴下は武門なるゆへ、学問しながら後生をふかくねがひ給ふや。仏法をそしり給はず、すこしあまき様に見ゆるはいかん。三近子答曰、古語に不二荀訾一不二荀哂一といへり。荀といふは麁相にして念を入れず、うか〳〵としたる手尓葉をいふ。わが胃の腑に落ず、不案内なる事を、出るまかせに訾笑はぬものなり。惣じて人を訾」（14・オ）謗といふも、能々内外ねんごろになじみて、気質も知あひてこそ、其間隙をうかゞひ見付て謗る事も有べし。見ずしらぬ事をそしるは、其実にあたらぬゆへ、これを滅相と名づく。殊に我々は儒者にあらず、家業の武備さへ疎ければ、まして仏教は猶更不案内なり。仏書をもしらず、不案内なる事を謗るはこれ滅相にあらずや。其うへ今の世に先祖の忌日命日にあたりて、何をして孝養にいとなむべきや。位牌にむかいて大学朱熹章句も読れまじ。書」（14・ウ）経春秋どころにても有まじ。念仏読経の孝養がてうど相応なるべしとおもはるゝ也。念仏題目たつとしといへども、これをとなへて、一気をはなれたる先祖の尸に金色のひかりもさすまじ。父母の忌日につくねんとして居らるゝものにあらず。後生沙汰は暫くやめて、忌日には灯香合掌の拝が似合相応といふべし。殊にいかなる大儒といへ、今時に死しては、其尸は寺へならではゆくべからず。我どふで遺骸のゆく寺の作法をそしるは、血を血であらふ道理。これ荀も」（15・オ）訾といふものにあらずや。右の心入ゆへ、我に仏法をそしるべき力量なし。又世の学者として仏法は偽り也、なき事なりとて、息筋をはりて世話をやくものあり。有たらば、何程の邪魔ぞ。無事をいふはいか程の害ぞ。さして苦にもならぬ事に瞋恚をもやすは、さし当り其身の損なるべし。

北国方の陪臣に家禄千石の士ありしが、無比類後生ねがひにて有し。たゞ一跡に一人の男子を僧にして、永平寺にのぼせ、仏学相勤」（15・ウ）よとの事なり。親族家従ともに家督の絶する事をいたく悲しみ、さま〴〵と諫めけれ共、かの士いさゝか承引せず。一子も力およばず出家となり、三年永平寺に勤学して父の方へ来れり。父もめづ

らしく悦ばしく対面し、さて仏学はよく務たりや。嘸々たふとき事のみにて有らん。咄しに成とも、きかん事を欲ると云ければ、子のいわく、日夜三年と申す星霜を、仏書に眼をさらし候へば、恐らく見残したる書も候はず。さて〳〵仏法と申ものは莫大なる」（16・オ）偽りをいたしたるものにて候。釈尊の説置給へる事、一つとして其実御座なく、うそにてかためたるものにて候と云ければ、父大におどろき、扨は仏法は浮説ばかりかや。さやうの事とは、いさゝか知りわきまへず、うか〳〵と暮したる浅ましさよ。さやうの事ならば、其方事はいよ〳〵道心堅固にして、仏学を精出し、名僧にも成り候へと、思の外展転の言葉なりしかば、家内のもの上下に至るまで乱心かとおもひて、父の顔色をながめき。暫くして、かの士申けるは、凡」（16・ウ）うそといふものは世界の人かしこくして、三日とは其うそ行はれざる物なり。ましてうその十日とつゞきたる例なし。しかるに仏涅槃に入給ひてより、凡そ三千年の間、其うその化があらはれぬ仏法なれば、誠より有がたきうそとて感涙をながせしと也。時にとりては、尤なる理屈なり。又其隣国に家禄弐百石ばかりの貧士あり。男子九人ありて、食服ともに難儀身にせまれり。ある禅僧一人来りて曰く、大勢の男子の内一人出家にし給へ。一子出家すれば九族」（17・オ）天に生ずると申は如来の金言にて候とすゝめけり。士のいわく、近比御志し信切にて、謝する所を知らず候。しかし、一子出家して九族まで天に生れ申義ならば、釈尊の直弟子神通第一とよばれし。目連の母は無間地獄に堕する筈は無レ之候。阿羅漢の化を受たる出家の母親が、地獄に堕してもろ〳〵の苦患をうけられしゆへ、目連もたへ忍びがたく、亡母の為に盂蘭盆会をまふけられしとなん。いわんや、我ら如きの大凡下の人、二子三子を」（17・ウ）出家にせし共、地獄の釜こげに成可申候間、我らが子共は、やはりなじみたる武士にいたし申より外に了簡なく候と答へしと也。是も遁辞なるべけれ共、時にとるとては、おもしろき見識ともいふべし。

神道は、天津日嗣の至道を説て崇き道、又幽高にしてたやすくは入がたし。万国にすぐれて有がたき道なり。神道は心道なり。心は仁義の徳をそなへて、たつとく自然に正直なるものなり。神道は外にもとむるにあらず。」（18・オ）心のまゝ、うら表なくすぐなる道也。干木もまがらず、かた衣木もそらずとあるも、正直をいふ。随分簡古なる物なれば、上下ともに信じまなびたき物ぞかし。垂加翁洛西芦屋町にて平生諸門弟に教訓せられしにも、日本に五行をうけて神道を学ばざるは日本の唐人なりと云て笑れし。神書は神秘も多ければ、人により機根の強弱あり。唯一両部の差別ほどの義はかみわくべき事なるべしとぞ。

祈といふ事、無事幸福の人には有まじ。なんぞ」（18・ウ）災か病気かに神慮の冥加を頼む筋尤なり。唐にても子路の英才孔子の

御病の時祈らんと請れし事、信切の迫りなり。非常の時には随分丹誠すべき事にや。皇太神宮の詫宣にも神至るに祈るべし。冥を加ふるに、正に直なるを以て本とすとあり。祈祷は神につぐるの謂なり。徴あるを冥加といふ也。祈祷をするに即時にきく物にあらず。目に見へず、心にも覚へずして、自然とかなふを冥を加とはいふなり。草木の発生するがごとし。」（19・オ）毎日見つめて居ても伸る形は見へず。日数を経る程生長する。これを冥加といふべし。

児戯笑談巻之一終」（19・ウ）

児戯笑談巻之二

中村平吾三近子撰

時勢をしらざれば、無用の費あり。人々、今日さし当り重宝になる物は暦なり。かほどのたからも、去年の暦は再び見る者もなく、貧家はこし張にはり、紙くず籠の住居となんぬ。人間の用捨も暦のごとし。いかなる勇猛奮迅の四天王ともいへ、七十八十になりては、みな去年の暦といふべし。

俗間に道理そこのけ無理の通にといふ事、面白き」（1・オ）ことなり。常道をかたれば、邪は正に勝事あたはず。無理は道理にかつ事あたはざれども、又理の劫ずるは非の一倍なる事ありて、あまり理がすぎればおこなはれざる事あり。博学の人山川地理を論ずるにも、今上方筋大和川など土砂高くなりて、切々川ざらゑなどありても、其まゝ川どこ高くなる事は、諸山の木を切つくしたるゆへ、草木に水をふくまず。大雨の時もはげ山へおちて、其雨をとゞむべき枝葉なければ、其山の雨のあしすぐに、土砂ども河へ流れ入て、」（1・ウ）大和川などの様にさらへても、又あとより土砂、大雨ごとに川上より流れこむ。草木なきゆへ、雨をふくむべきものなき故なり。禿のかしらに水をかけたると、坊主のかしらに水をかけたるごときとのたとへなど、始終山川地理じまんに聞ゆれども、是も学者の見識、理のこうずるは非の一倍といふべきか。尤たとへをとり、理屈をいふたる所、いやといはれざる様に書なせども、理とわざに成ては、又大小違ふたるものなり。先草木は切ても跡より段々生ずる」（2・オ）もの、せんぐり星霜をつめば枝葉もしげる。是天地生々の道理なり。草木に雨をふくまず、大雨ごとに山より土砂をながしこむならば、山は次第に平地にもなるべし。曽て草木の雨をふくむなどのわざにてなし。むかしと違ひ、山川の分別、今はかしこく成て、川はゞを夥しくひろげたるゆへ、大水おし来りても、川はゞのせまき時とちがひ、水勢ひろがりて、おのづから堤ももちこたへる事也。水はゞひろきゆへ、川どこ高くなる筈なり。たとへば、今はゞ一間の」（2・ウ）舟に水を一ぱい入て、其水

をはゞ一倍のひろきふねにうつす時は、水ひろがりて舟半ぶんにあさくなる道理なり。平日は水流は増減なし。わざもなさず、たま〳〵の洪水になりては、いかほど川上の山に草木しげりたり共、川はゞせまくば、田所の分みな土砂入こみて、何の用にも立まじ。いま川はゞひろく成て、水勢もおのづからひろがり、それゆへ川床たかくなる事には気をつけず、たゞ山川の理をおしたるまでにては、わざに成ては塞て通ぜざる事おほし。医学綿蜜にして、」（3・オ）万書にくらからず、博識多才の医者は理がつみすぎて、かならず療治のわざになりては、学問ほどにきゝめのなきやうになるものなり。

正法に不思議なしといふ事、おそらくは意味の取ちがへなるべし。不思議とは神妙不測にして、他よりはかりしられざる事なれば、正法こそ不思議あるべし。浄土真宗に九字十字といふあり。如来甚深微妙の徳を称美して、南無不可思議光如来と名づく如来は正法なり。定て正法に怪なしの心を取ちがへたる妄言なるべし。」（3・ウ）

身は親の遺体なれば、すこしも身をそこなはず、大事にかくるを孝とすとあり。もつともなる事なり。しかし、一概に心得たる時は、事にのぞんで妨げる事あり。それは人にもより、場所にもよるべし。いかに身を大事にかけるとて、今日武士とて死すべき場も、いのちをおしみのがるゝ時は、節義をうしなふのみならず、孝道にも漏る事なり。かるがゆへに、戦陣に勇なきは孝にあらずとしめし給ふは、武門の孝道なり。くらゐにより、人により、尤心得あるべき事なり。」（4・オ）

古の聖賢孝道を説しめし給ふ事、十分尽頭なり。聖人の教にてさへきかぬ人情なれば、今更何を説たり共、不孝者は三世の諸仏も捨て給ふといへば、まして凡夫の手ぎわにて、ゆきとゞく事あるべからず。然りといへども、不孝を勝手次第にせよとは、みす〳〵の不仁なれば、ならぬまでも孝をすゝむるが教訓の法なり。いか程不孝なる悪人にても、我子の不孝はこのむ者あるまじ。是程になりやすき孝行、無造作なる事をかへつて逆にゆくは何ぞや。成よき善事をきらひ、手間」（4・ウ）のいる悪事をするは、人情に異を好む意地づくより、りきみが出てかくのごとし。古人も悪には入やすく、善にはうつりがたしと説しかども、却ておもふ悪は水を逆倒に流すごとく、よほどむつかしく大儀なる物なり。善は水の流れにしたがふごとく、何のむつかしき事なく、無造作なり。今日悪事をおもひたゝんに、先づ人目をふかく忍び、呼吸をつめ、心中の辛苦もや〳〵として、さり迚はせわなる事ならん。善道は人にかくす事もなく、おしはれたるわざ」（5・オ）にして、心中に労もなく、ずら〳〵としたる物なれば、勝手づくには善道が近道なるべし。人間異を好む意地よりはじまりて、幼童までが川といへば海とさからひ、その避愛つゐに不孝といふ悪事にいたる事なり。

婦人人に嫁しては、嫡に孝行をする事、家に有し。父母よりも

なを大切につかゆるはづの事ぞかし。俗間動れば姑と婦との中あしくなりて、たがひにいかり憤る事の多はいかん。これこそ有まじき事にて、畢竟はみな婦たる」（5・ウ）人の咎なるべし。其本を推繹ぬるに、婦たるもの、最初結納をうけし日より、やがて夫の家へゆきなば、恐らく姑に不孝をなすべしとたくむ悪念は、万人に一人も有まじ。姑もやがて婦来りなば、中わろくしてにくむべしとおもふ悪心は、決してあるまじ。双方此所みな善念なり。殊更姑は、国にもかへじとおもふ恩愛の子の妻たるものをにくみふづくむべきいはれなしといへども、なじみかさなり、心やすくなりて夫の心に入たるを、女心に功にきて、」（6・オ）姑に麁末にあたる所より、つゐには不孝の場にいたる事と見えたり。此所を古の聖人も察し給ひしにや。教レ婦初来と説給へり。婦におしゆる道は、婚礼の初め、いまだ家の勝手をしらず、弁まへず、うゐ〳〵しき内に教へきかせよとありて、姑には教の言葉なし。しかる時は邪佞ところ、全く婦に有と見へたり。愚痴無智の婦ともいへ、舅姑に孝行をするすべはしるべし。今不孝の婦に、なんぢ姑に不孝ものといはゞ、覚へありとて、よろこぶべきや。又」（6・ウ）孝行なる婦といはゞ、不孝の覚へはありながら、大に悦ぶべし。しかれば、孝行もかみわけたる善念あれば、婦として舅姑には真実心に孝行をつくし、舅姑のたんなふするやうに勤むるが婦徳の第一ぞかし。卑賤の卑俗、何とわきまへたる事もなく、姑は婦をにくむはづの物と法式のやうにいひならはす事、なげかはしき事にあらずや。

むかし奥州の国守田猟に出られしに、道の傍に老たる母を負ながら、平伏せし人あり。国守」（7・オ）いかなる者ぞと問給ふに、かの人曰く、此辺に住ものにて候。老母、国守を拝し奉らんとねがふにより、母の心をなぐさめたきこゝろざしにてかくのごとし、と答へければ、国守も其孝心に感じて、いろ〳〵引手物を賜りて家に帰りぬ。その後、程を経て、国守田猟に出られしに、又前日の如く老母をせなかに負て、平伏したる男あり。国守そのゆへを問給へば、しか〴〵の孝心を答へたり。時にかたへの人のもふさく、彼は悪逆不孝のものなり。はじめの孝子を贋てかくのごとし。急度」（7・ウ）罪し給へといふ。国守のいわく、不可なり。此もの不孝の悪人なりといへども、すでに孝行を似せたるは、能まねといふべし。舜を学ぶは舜の徒なりとて、いろ〳〵の引出物を賜しとなり。かりそめにも孝のまねをすれば、かくのごとき善報あり。

下々の俚諺に、大名の火にくばりたるごとしといふ事、大容なるたとへにいふ事なり。しかし、いかなる大名ともいへ、火にくばりてよい物か。是は大明の火にくばるといふ事なり。大明は日月なり。」（8・オ）日月の光気火にくばりても、自若として其本体うごかぬといふ心なり。

世に善人は少く、悪人ばかり多しと口ぐせの様にいふ。甚だ心得ち

がひなり。今現に京ばかりを以ていはゞ、男女の数凡そ二百万人も有べし。此多き中に大それたる悪人は一人か二人かに、悪のものわづか十人廿人を以てかぞへつべし。残りたる人はみな善人なり。一つ〳〵心内をさがさば、聖賢もあるまじけれども、夫はいにしへにもまれ也。聖人は生民有てより、後にも先にも孔子の」（8・ウ）様なるはなし。大概人間の吟味、百万人の内に三五人の出入こじもあれども、残りたる人間みな善人なれば、卑賤といへども学問といふ事わきまへずんばあるべからず。

成立難如レ升レ天、覆墜易如レ燎レ毛といへり。相続の成しがたき事、天に升るごとく、破る事は一筋の毛をやくより無造作なり。俚諺に、家を覆てば釘の値といふも此心なり。金銀をかりて耳をそろへて返弁するは天に升るより大儀に、不埒をするは毛をやくよりも心やすきならひ」（9・オ）なり。然れども、人情の欲といふ物は、はなれがたきものにて、莫大の利足を寝ながら儲ける事なれば、やめられぬも理りなるべし。世の中は一損一徳にて、彼に得あれば是に損あり。長短得失平等に行わたらぬが世の分野なるべし。

利口の邦家をくつがへす事をにくむと古人もいへり。何にてもいへばいはるゝ物。糟糠のくづれたる事にも理を付ていへば、いはるゝ口上は重宝なる物よなふ。紫野の一休小僧の時、外より檀那が来り、是小僧どの、袂屎はどこ」（9・ウ）から出るぞ。小僧の曰く、臂臀といふ尻からこく。目屎はいかん。眦といふ尻からこく。ぼんのくぼはいかん。あたまにおどり有ゆへと答られき。口器用なる物は、いろ〳〵にいひまはす事なり。右の檀那我を折、いそぎ立かへる時、一休の曰、なんぢ是より何方へ行や。檀那腰の扇をぬき見せれば、一休それはあて字なりといはれき。扇は戸羽と書り。夫ゆへ、とばへ行心をしめすといへ共、元来とばは鳥の羽とかくゆへ、あて字といはれたる。一休の頓智、口きゝの上もり、いへばいはるゝ言葉のたねなるべし。」（10・オ）

楊貴妃、一旦玄宗の心にたがふて芙蓉宮に居たりし時、君に思し召出されて、高力士に楊貴妃が安否を問しめ給ふ。楊貴妃君恩の有がたき余、涙と共に我黒髪をきり、恩を謝す。高力士、そのゆへをとへば、楊貴妃が曰、我にある所の万器衣食玉帛、いづれか君の物にあらざる事なし。君の物を以て君の恩を謝する道理なし。我一身のうち、髪は我父母よりもらひし物なれば、是ばかりは我所持の物ゆへ、是にて恩を謝し奉ると言ければ、玄宗も是に感嘆し給ふて、再び寵愛厚かりしといへり。女」（10・ウ）ながらも理一分殊をよくわきまへたりといふべし。

人間は貴賤ともに冥加といふものを能々理会て体認すべき事なり。此二字が学問の吉粋なり。唐土には冥加の二字を説おとせしゆへ、学問の心にしまりなし。冥加は神慮にあづかる所にして、貴賤一生長寿

百祥の基と知べし。大人の冥加あり。下民の冥加あり。悪人は冥加につきて一生をたもたず。俗間に、信あれば徳ありといへり。信徳を兼たるを冥加といへり。大人は太平治化に居て、枕を高くして楽を」（11・オ）極め、下民は太平治化をいたゞゐて、生理を安んじて心静なり。こゝに気を付て、せめて一日に一度づゝは有がたき事とおもふ所が冥加といふものなり。上つかたより仁慈を施し給て、愛愍ゆきわたるといへども、下民うか〳〵として、結句疎懶の情をいだく時は、民に七年の惶損有といへり。

足事をしるを俗呼で足納といふ。四民僧俗共に我にそなはりたる職分にたんなふして、外をねがはぬを勤といひて、是直に学問なり。かの」（11・ウ）瘖聾を見るべし。人間とは六根の内二根不足して、片輪にて不自由なる事なれども、仕形にて会釈すれば、何もかも理会して、いさゝか不自由なることもなし。これ仕形は瘖聾のための学問なり。六根そなはりたる人間には、動もすれば非道をたくむ者もあり。むかしより瘖聾の悪事仕出したることを聞ず。六根揃ふたる身にして不正をなすは、浅ましき事にあらずや。

近年は天台宗・華厳宗・法花・浄土、諸宗の」（12・オ）博僧出て、是非得失の討論、説派筆陣の印行、若許出しが、釈尊なければ、面々いひ勝高名にて、一決せし事もなし。大かたは円寂して、跡に生き残りし僧が勝になりたるもおかし。ある隠者の五人、連歌の会に出て、打つれ帰るさに、一人は四つ辻にて相わかれり。残り四人が評じて、今の仁の今日の詠草、おもひきやの五文字は、あまり古めかしき歌とそしり合行しが、又一人寺町にてわかれ行けり。のこり三人が、あの八文字やの今日の歌、見わたせばの」（12・ウ）五字は、どふやら和歌の三夕を似せたる様などそしり合、又一人四条にて相わかれけり。残り二人が此素伯の今日の歌は、つきにけるかなのとまり、どふやら高砂の小うたひの格と評し、程なく今一人宝町の辻にてわかれけり。一人の遁世者が堀川の辻にて小者にむかひ、今日の連衆はみな下手なりといひければ、小者が返答に、あとにのこりたるみちの遠き御方が御上手と見へたりといひしとぞ。近年の論僧もながいきして、あとに残りたるが関取と見へたり。」（13・オ）

人として不成日をゐらび、又男女の縁に相生を吟味する事、よく〳〵気を付て見れば、面々の得手勝手よりおこる事と見へたり。不成日など児女の当分の心やすめは各別の事、丈夫たるもの、あながちに用ゆる事、用捨あるべき事也。人間の大事は誕生日なるべし。我が生れ出る日にして、一生の安否のあづかる所なり。幾千万人か不成日に生れる人あり。これゐらびて不成日を除て翌日までのばす事ならざる所あれば、此一大事の不成日は、人々しらぬふりにて、」（13・ウ）うち過ぬ。義経生田の森の矢合の日は、往亡日にあたれり。軍士みな往亡日は往て亡ると書たれば、此軍よろしかるまじといひければ、義経の

曰く、みな〳〵点の付やうあしく、往てほろぼすといふの吉日なりとて打立、つゐにその日のいくさに十分の勝利を得給ひけり。夫婦の縁はさる事なれども、五倫のうち君臣ほどおもきものなし。いにしへより君臣の間に、相生を見てめしかゝへたる事もつかへたる事もなし。父子の間も火性の父に水性金性の子あり。」（14・オ）いかんともする事なければ、男女の縁組相生を見るに及ばぬ事とおもふなり。かくいへばとて、物事かきやぶりなるもよろしからず。万事かきやぶりになれば、凡俗のならひ必ず悔みに成事もおほし。もつとも、目かり了簡をつけて、物ごと相応をもちいたし、念仏功徳ふかしとて、正月の元日に、大福を南無阿弥陀仏にてもいはゝれまじ。先不相応なり。易に吉凶悔吝の四つをとく事、其むねふかいかな。四つの内、ことに悔の事を聖人もおもく語給へり。それ」（14・ウ）人は、吉にあふては当惑もなく、相談相手もなく、みんごと我と我手に処する事也。凶に成ては悪ゆへ、当惑してみづからさばく事なりがたく、人と相談のみする事なり。悔とは後悔といふ心なり。人々毎日の所為、その跡は大かた後悔になる事なり。吝は決断なき事、仏者の迷ひといふと同じ。易道は天地万物の理をこめたる物にて、中々凡俗の理会しやすき事にあらず。其徳なければ、占ふといへども、一つもあわぬ物なり。易の理をあしく心得たる人はかろく」（15・オ）おもふて、俗にいふ、ごまのがうの穿議に落る事おほし。梅花心易所々の御籤等は、みな児女のごまのがうを引だす筋と見へたり。

論伽論一百巻にも多く相応の二字を解たり。相応といふ事、仏説にいでゝ、古きこと葉なり。日本の俗、分際相応といへり。相応は恰好すること葉にて、大小厚薄万端によくかなふたること葉なり。儒道にこれを節と名づく。節はほどよしと訓じて、竹のふしのよきほど、つゝに間くばりたる心なり。人間」（15・ウ）この相応一日もかけては万事に通達する事あたはず。いかに義が結構なる道なれども、父母へ義を以てする時は不相応ゆへ、父母には仁道の孝順を以てつかへるが父子の間の相応なり。四書六経至極の書物といへども、火事場にて見るはよき道を不相応になる事也。人よく相応を用ゆる時は、一生の内あやまちなかるべし。

日本の唐土天竺より奇勝たるは、神道あるをもつてなり。異国は長上の人ほど狐狢など」（16・オ）いひて、畜生の皮を上服とす。日本は神国ゆへ、けだものゝ皮は火事羽織、或はさいふ、又は敷もの大鼓等には用ゆといへども、礼服には用ひず。異国には牛を料理して大牢の滋味とて本朝の七五三よりおもしとす。日本にては牛を食すれば、神前へ一百日むかふ事ふかくけがれとす。これ我朝の他邦にすぐれたる事かくのごとし。世上の学者たるもの、多くは唐の風を好み、おのれは五行を日本にうけながら、書面は唐流などをかき、服には深衣」（16・ウ）などを着する儒者もあり。これ日本の唐人といふべし。書筆の事、

唐流あしきといふにあらず。しかれども、今日書状手紙の往来用事を弁ずるを以て第一とす。夫に唐流を以て、書状を認めたる時は、俗家よむ事あたはず。まづ我生国の和流を能書して用事をたし、其後は唐流なりとも何成とも、心まかせに書が書筆の順道なるべし。

俗間に、両雄は必ず争ふといふ事、人ことにひたといふこと葉なり。此語、智者の語にあらず。」（17・オ）もつとも文盲なる筋よりいひ出せり。雄とは英雄の雄にして、智勇兼備したる人ならでは雄とゆるす事なし。相役にもせよ、同役にもせよ、両雄ほどの智勇の人が中をわろくしあらそふなどいふ若輩なる事あるべき様なし。故に、三近子此語を飜じて、両愚はかならずあらそふといひたしといふ。

児戯笑談巻之二」（17・ウ）

（次号につづく）

謝辞　本稿の翻字の再確認を九州大学大学院博士後期課程吉田宰氏にして頂いた。この場を借りて感謝の意を表したい。

（わきやま　まい・伊万里特別支援学校）